# 視野研究会

吉冨 健志
（秋田大学）

## はじめに

専門別研究会は，2008年から日本臨床眼科学会に統合され，視野研究会も日本眼科学会から日本臨床眼科学会に移った。今回は福岡で行われた第63回日本臨床眼科学会初日2009年10月9日（金曜）午前に開催された。プログラムの運営上，午前8時10分からの開始という朝早いスケジュールにもかかわらず，参加者は180名と盛況であった。本研究会の会長を2005年から務めておられた故北原健二先生は，2008年10月に開催された前回の視野研究会を最後に会長職を辞することを表明しておられた。しかし，体調を崩されて研究会を欠席された直後に突然ご逝去されたとの知らせを受けた。北原先生は長年にわたって視野研究会の発展に寄与され，その温厚なお人柄で多くのお弟子さんを育成してこられた。その早すぎるご逝去を悼み，この場をお借りして心からご冥福をお祈り申し上げる。

今回の視野研究会は，まず北原健二先生への黙祷から始まり，特別シンポジウムとして，「北原健二先生メモリアル」を企画させていただいた。このセッションは北原先生のお弟子さんである5人の先生方に，視野に関係する以外のことも含めて，北原先生のご業績を紹介していただく企画である。座長は視野研究会の現会長である松本長太先生が務められた。

ご講演いただいたのは東京慈恵会医科大学で北原先生のご薫陶を受けられた中野匡先生，吉田正樹先生，仲泊聡先生，渡辺朗先生，林孝彰先生の5人である。北原先生の業績は幅広く，色視野を中心とした心理物理研究，色覚異常とそれに関連する遺伝子の研究，fMRIを用いた脳機能画像に関する研究などのお仕事を広く紹介していただくと同時に，北原先生のお人柄を偲ぶエピソードもご紹介いただいた。

引き続いて一般講演とシンポジウムを例年どおり企画させていただいた。一般演題6題とシンポジウム4題の内容を簡単に記させていただく。

## 一般演題

1．水俣病認定患者における長期視野経過
松井孝子（秋田大学）

水俣病はメチル水銀中毒疾患で，求心性視野障害をきたすことが知られているが，演者らは，1970～78年に水俣病に認定された患者6名（68～86歳）の認定当時のGoldmann視野計による視野を，新たに測定した視野検査の結果と比較した。その結果，6例中5名は認定当時より視野が拡大しており，3例で水俣病以外の疾患による視野障害の可能性が増加していた。水俣病の長期経過を調べた価値ある研究と思われた。

2．各種機能選択的視野検査におけるPolar Graphの有用性
七部 史（近畿大学）

Polar Graphとは，視野測定点を網膜神経線維走行をもとにグラフ化したものである。開放隅角緑内障症例47例47眼の構造的変化の評価をStratus OCTで行い，機能的にはSAP，SWAP，FDT，フリッカ視野計の4つの視野計による結果をもとにしてPolar Graphを作成し，構造的変化と比較した。機能変化と構造変化の対応をみるうえでPolar Graphの有用性を示す発表で，今後の展開が期待される。

3．オクトパス視野計による半自動動的視野測定の再現性
白井理絵（新潟大学）

Octopus視野計には動的視野測定を半自動的に行うプログラムが搭載されているが，この再現性について検討した発表である。評価は各視標のイソプタ面積を算出して行い，比較的良好な再現性が示唆された。動的視野も自動で行う時代がきたと感じさせられた発表であった。

4．緑内障性視野異常のCirrus OCTによる他覚的評価
藤本尚也（井上記念病院）

OCTによる網膜神経線維層と緑内障性視野異常との相関を検討した発表で，対象は原発開放隅角緑内障である。OCTで測定された平均網膜神経線維層厚とHumphrey視野計の視野指標（MD，PSD，VFI）との

 0370-5579/10/￥500/論文/JCOPY

間には有意な相関があり，局所的にも，網膜神経線維層の菲薄化とほぼ一致したとする発表である。視野のような機能的解析と OCT による構造的変化の解析の比較については，今後ますます重要になってくると思われる。

5．各種自動視野計の動的測定プログラムを用いた身体障害者認定について　　橋本茂樹（近畿大学）

身体障害認定の視野判定における問題点が最近話題になっている。今回の発表は，シミュレーション上でさまざまな視野計のプログラムを用いて動的視野測定を行い身体障害認定の判定の有用性を検討したもので，自動視野計を用いた動的視野測定が発達してきた現在，避けて通れない問題を提起したものであった。

6．中心視野検査プログラムと Esterman テスト

菅野　誠（山形大学）

自動視野計の視野閾値検査プログラムもさまざまな改良が加えられ，種類や目的もいろいろなものが作られている。中心閾値検査と Esterman テストの結果を比較した今回の発表は，まったく異なる検査点配置を持つ 2 つの検査を比較してある程度の相応性があったことを示したもので，視野計のプログラムの進歩とともにそれを検証する研究も必要になると感じた。

**シンポジウム**

今回のシンポジウムは「視野と Quality of Life」と題して，4 人の先生方に講演をお願いした。視野は患者の診断，治療方針の決定に役立つと同時に，視覚障害者の認定基準にも利用される社会的側面も持っている。視野が持っているこのような社会的側面は，視野計の進歩や測定方法の進化と同時にさまざまな問題を提起してきている。このような問題について考える場としてこのシンポジウムを企画させていただいた。視野と患者さんの日常生活の不便度をどのように評価するかについてさまざまな立場から発表していただいた。

まず，近畿大学の若山曉美先生には「両眼視野における両眼加重の働き」と題して，両眼視野の評価について話していただいた。患者の quality of vision を評価するには両眼視野が不可欠となる。しかし両眼視野は，単眼視野を単純に重ね合わせただけではない要素がいろいろとあることを示した講演であった。両眼で実測した両眼視野は単眼視野の重ね合わせから得られた両眼視野の広さより大いこと，反応時間については単眼よりも両眼の反応時間が短く，両眼加重は網膜部位によって異なるなど，両眼加重の働きは非常に複雑であることを認識させられた。

次に自治医科大学の国松志保先生には「緑内障患者の QOL と視野」と題して，緑内障における視野障害が日常生活にどの程度の困難をきたすのかを評価する尺度についての知見を述べていただいた。さまざまな尺度によって緑内障患者の生活不自由度を定量化し，視野との関連を検討した過去の報告を中心に紹介された。また，視覚障害者認定の基準のほかに緑内障患者の QOL を考えるにあたり，地方都市では避けられない問題として，自動車の運転の問題がある。日本の普通運転免許の取得・更新基準の問題点も含めて考察していただき，この問題が医学だけでなく社会的な問題を含むことを認識させられた講演であった。

さらに国立障害者リハビリテーションセンター病院の仲泊聡先生には「視野と QOL」と題して，眼科での視野検査の結果が実際に見える範囲であるという思い込みに疑問があるという，新たな視点を提起していただいた。最近の研究で，周辺視野が障害されていても，周辺視野にある対象をサッケードにより中心視野に入れることができるということが示され，これができれば，行動上の制限はかなり減少すると考えられる。この講演は視野と QOL という問題が非常に複雑であることを示された講演で，最後のご講演である中野総合病院の鈴村弘隆先生による「視野と QOV―社会との関わり」でも示されたように視野検査の結果を社会とのかかわりのなかで考えてゆくという視点が重要であることを示した講演でもあった。鈴村先生が示されたのは，患者さんの視野が日常生活にどの程度影響しているのかについて，であった。視野障害は視力障害と比べて自覚的に気がつきにくく，患者自身の訴えも視力障害に比べて乏しいことが考えられる。そして視野障害を日常生活の不便度とどのように評価するかという問題とともに，自動車の運転免許の取得条件や身体障害の認定など，社会との関連も避けて通れない，非常に難しい問題をはらんでいることが示されたシンポジウムであった。

**おわりに**

「博多臨眼」の初日は，台風の影響で講演者の到着が遅れそうになるなど，はらはらすることが多く，参加者も少ないのではないかと覚悟しておりました。朝 8 時からの開始，前日の台風で東京からの交通が止まってしまったことなど，数多くの不利な条件にもかかわらずたくさんの聴衆が参加し，活発な討論が行われた会でした。新しい視野測定法，社会とのかかわりなど，この研究会の果たす役割は今後とも重要になってゆくと思われます。この研究会のますますの発展を祈ります。